影響を受けたこの一冊

都　村　敦　子

確か1960年代の半ば頃のことであった。社会保障研究所の谷昌恒先生（現在北海道家庭学校長）は多忙な研究の合間に，翻訳の仕事に打ち込んでおられた。当時，社会保障研究所は霞が関の久保講堂に隣接する古い建物（現在新霞が関ビル）の中にあり，狭い研究室に約10名の研究員が机を並べていた。平日の夕刻や土曜の午後になると，谷先生の養護施設長時代の子どもたちから，しばしば相談の電話がかかり，先生は「翻訳が佳境に入るところなのに」などとぼやきながら，しかし嬉しそうに教え子たちに会いに出かけておられた。

谷先生は，Richard M. Titmuss の *Essays on 'the Welfare State'*, Second Edition, 1963 の翻訳に集中しておられた。これは『福祉国家の理想と現実』というタイトルで，社会保障研究所翻訳双書 No. 3 として1967年に東京大学出版会から刊行された。私は同じ研究室で，翻訳に熱中されている谷先生に近く接していたが，本の内容は出版されてはじめて知った。社会保障研究において，大きな影響を受けた一冊の本をあげるとすれば，私は迷うことなくこの書を選ぶ。

この書は，ティトマスの10篇の講義から成っている。私がとくに興味をもったのは，"The Social Division of Welfare : Some Reflections on the Search for Equity"（翻訳書第２章）であった。これは，1955年12月１日，バーミンガム大学における第６回エレナ・ラスボン記念講義として，ティトマスにより行われた講義を再録したものである。

この論文において，ティトマスは従来のソーシャル・ポリシーの概念枠組および分析モデルに限定せずに，もっと広いフレーム・オブ・レファレンスのなかで，ソーシャル・ポリシーを考えていくことの必要性を論じた。ティトマスはソーシャル・ポリシーを３つの体系，"social welfare", "fiscal welfare", "occupational welfare" に分けた。ティトマスは社会保障（福祉国家の核としての現金給付とソーシャル・サービス）はソーシャル・ポリシーの氷山の一角であるとし，その他にソーシャル・ポリシーの氷山の間接的な，あるいは見えざる部分としての財政福祉（税制を媒介として，所得控除や税額控除の形で支給される給付）と企業福祉（構成員の福祉の増進および企業の諸関係の改善のため事業主により支出される給付）を合わせて考えることの重要性を指摘した。ソーシャル・ポリシーには社会制度的にみて３つの区分が生じているが，３つの体系の給付間の機能の類似性を重視し，政策間の調整，または統合を行うべきことが論じられた。

ティトマスは第２次大戦後20年間，ソーシャル・ポリシーがその目標を達成できなかったことをしばしば批判してきたが，その主たる理由として，次の５つをあげている。(1)概念枠組みを狭く限

定しすぎ，“ウェルフェア”を“貧困”と関連させてきたこと，(2)法律を制定すれば社会問題を解決できると安易に考えてきたこと，(3)経済分析の方法を開発したように社会分析の方法を1950年代に開発できなかったこと，(4)福祉を別個の概念枠組に入れ，経済・社会変動等と関連づけなかったこと，(5)ヴィジョンと創意に欠けていたことである。

ティトマスは，1955年の講義において，ソーシャル・ポリシーに独創的な，注目すべき，新しい次元を与えた。まさに，ソーシャル・ポリシーがその目標を達成するためには，ヴィジョンと創意が必要であることを示す講義であった。1955年12月といえば，わが国では，社会保障制度という言葉が一般用語としてやっと使われ始めたころである。“もはや戦後ではない”という経済白書を受けて，“果たして戦後は終わったか”という見出しで厚生白書（1956年）が国民の生活状態を示したころである。そのころすでにイギリスでは，広い枠組みのなかでソーシャル・ポリシーの有効性を問い直すことの重要性が論じられていたのである。

「福祉政策の“Harmonization”問題について——児童扶養控除制度と児童手当制度の一元化」（『季刊社会保障研究』第13巻第1号）——私がこれを書く構想を得たのは，ティトマスの論文を読んで，大きな刺激を受けたためであった。その後，「社会保障と税制との相互調整」を主たる研究課題とすることになった。

Adrian Sinfield や Brian Abel-Smith がティトマスの“The Social Division of Welfare”を世界のソーシャル・ポリシーに関する文献のなかで，もっとも注目すべき論文であると指摘しているのを読み，早々と本論文を含む講義集の翻訳を企画された初代所長山田雄三先生および訳出に当たられた谷昌恒先生の慧眼に敬意を表するとともに，この翻訳書により強い影響を受けたもののひとりとして，感謝を申し上げたいと思う。

（つむら・あつこ　日本社会事業大学教授）